
アンマンナーティ作《ユノの泉》と図像助言者コジモ・バルトリ

バルトロメオ・アンマンナーティ（1511-1592）が手がけた楕円アーチ型の特異な形態をなす《ユノの泉》は、コジモ1世（在位1537-1574 [1569年以降はトスカナ大公]）統治下のフィレンツェで進められたパラッツォ・ヴェッキオ改築事業の一環として、2階の大広間（サーラ・グランデ）の南壁に設えるために企画された。実装されることなく後代にはフィレンツェ周辺のメディチ家のヴィッラに散逸したが、20世紀以降の再発見と再構成の検討を経て、現在はバルジェッロ美術館に所蔵される。

大気をつかさどるユノが腰掛ける円弧の中に大地の女神ケレース、アルノ河、パルナッソスの泉を表わす各彫像を配する構想の解釈について、先行研究はこれを「水の生成」と見なす同時代の記述を踏襲し、支配者による善政の象徴と結びつけてきた。また《ユノの泉》の構想段階での図像助言者として人文主義者コジモ・バルトリ（1503-1572）の関与の可能性が指摘されているが、彫刻制作での具体的な協力関係の実態は明らかになっていない。これに対して本発表は、当該の泉を構成する6体の擬人像のうち、ペガソスを伴う女性像としての「パルナッソスの泉」がコジモ1世の文化政策では前例のない図像である点に着目し、その図像構想におけるバルトリの介在を実証的に示そうとするものである。

1540年に着工したパラッツォ・ヴェッキオの改築事業では、ジョルジョ・ヴァザーリが総監督を務めた1555年以降、主として内部装飾が整えられた。その際バルトリは1562年に駐在外交官としてヴェネツィアに派遣されるまで室内装飾の図像助言者として事業に携わり、レオ10世の区画（2階）と四大元素の区画（3階）の壁画構想をヴァザーリに提供した。バルトリ不在の後はヴィンチェンツォ・ボルギーニ（1515-1580）の主導で、1565年のフランチェスコ1世とジョヴァンナ・ダウストリアとの結婚祝祭に向けた一連の装飾が整備されたが、アンマンナーティが《ユノの泉》に着手したのはこれに先立つ1560年頃と見られる。

一方バルトリが擬人像の構想に長け、同時代の彫刻家フランチェスコ・カミッリアーニ（1530-1586）に助言をしていたことは、1567年に刊行された著書『ラジョナメンティ・アカデーミチ』に明らかである。カミッリアーニはコジモ1世の義父でナポリ副王のドン・ペドロ・ディ・トレドがフィレンツェに所有していたヴィッラのために《プレトーリアの泉》を手がけたが、そこにはアンマンナーティの「パルナッソスの泉」と類似性の高い女性像が組み込まれている。異なる彫刻家の作品における同一図像の共有は、図像助言者としてのバルトリの介在を具体的に示唆するものであり、先行研究が見逃してきた両作品の比較考察を通じて、同時期の彫刻制作における図像選択と制作環境の解明に新たな視座を提示したい。